

玉津陵墓参考地飛地い号外構柵改修工事に伴う立会調査

玉津陵墓参考地は、JR 山陽新幹線および山陽本線西明石駅の西北西へおよそ 1.2km 離れた兵庫県神戸市西区王塚台 3 丁目(旧明石郡玉津村大字吉田)の台地上に所在する前方後円墳で「吉田王塚古墳」とも呼ばれる(第 10 図)。当地については用明天皇皇子當麻皇子妃舎人姫王墓⁽¹⁾とする説があり⁽²⁾、明治 33 年(1900)には陵墓伝説地としての保存が決定されている。平成 12 年には墳丘裾・外堤内法護岸工事に伴う事前調査が行われ、墳丘第 1 段平坦面の埴輪列および敷石、第 2 段斜面の葺石が検出されるとともに、墳丘規模について、墳長 74 m、後円部径 44 m、前方部幅 42 m との復元値が提示されている⁽³⁾。

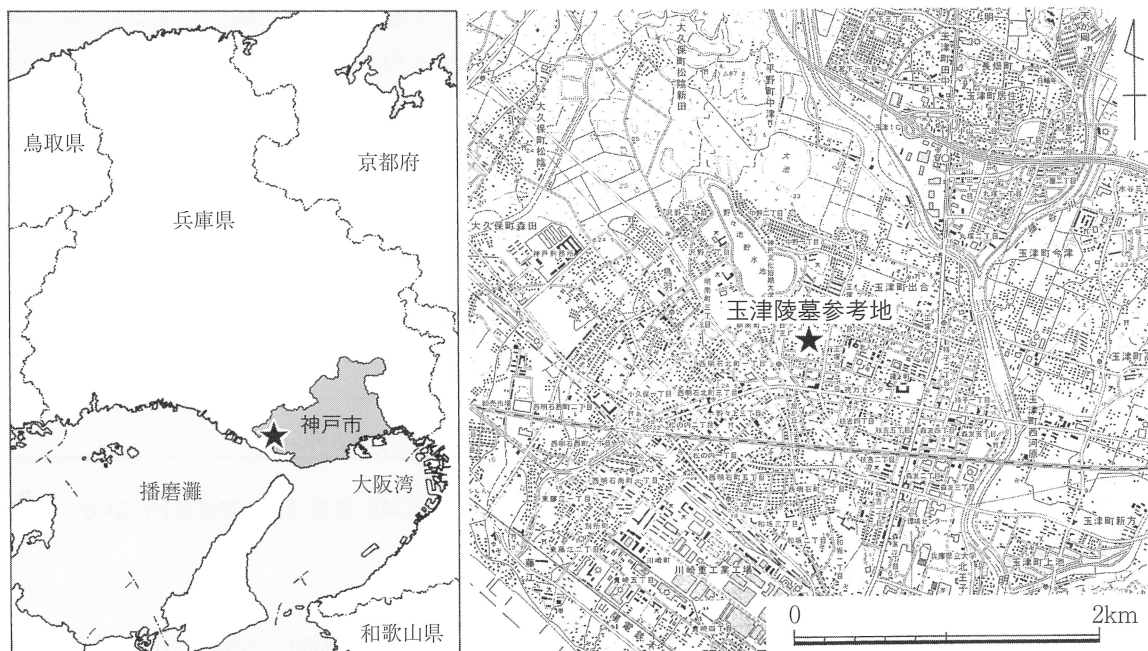
当参考地には上述の前方後円墳(以下、本地)の他に、い号、ろ号の 2 箇所の飛地が存在する(第 11 図)。

飛地ろ号は、本地から東南東へおよそ 300 m 離れた曙町に所在する。「経塚」⁽⁴⁾と呼ばれるが、「へり塚」という呼称も認められる⁽⁵⁾。現状の墳丘は方形に近く、一辺はおよそ 15 m、高さはおよそ 4 m である。その周囲は、昭和 40 年代に一帯で行われた区画整理事業の対象から外れ、離れ小島のような状況となっているが、かつては台地の縁辺部であったようだ⁽⁶⁾。

一方、今回の調査対象である飛地い号は、本地から北方へおよそ 300 m 離れた王塚台 4 丁目に所在している。「幣塚」⁽⁷⁾の名称が用いられるが、こちらにも「へり塚」⁽⁸⁾の名称が認められる。周囲は区画整理事業によって公園として整備されているが、公園の名称は「幣塚公園」である。公園敷地東側には南北方向の大きな段差があり、こちらも本来の立地が台地縁辺であったことを推測させる⁽⁹⁾。現状の墳丘は不整形な五角形状を呈し、各辺とも切り立った崖状をなしている。最大幅はおよそ 13 m、高さはおよそ 2 m である。墳丘最高所が東側に寄っているため、東側から南側にかけての崖面の高低差が激しい。北西側にはかつて掘り込まれていた痕跡と思われる浅いくぼみがあり、このためか墳丘西半部上面は緩斜面となって崖面へと続いている(第 12 図)。

当部所蔵出土品の中には本参考地出土とされる金環 1 点⁽¹⁰⁾がある。本地からの出土品とは思われないので、両飛地のいずれかから出土したものの可能性がある。

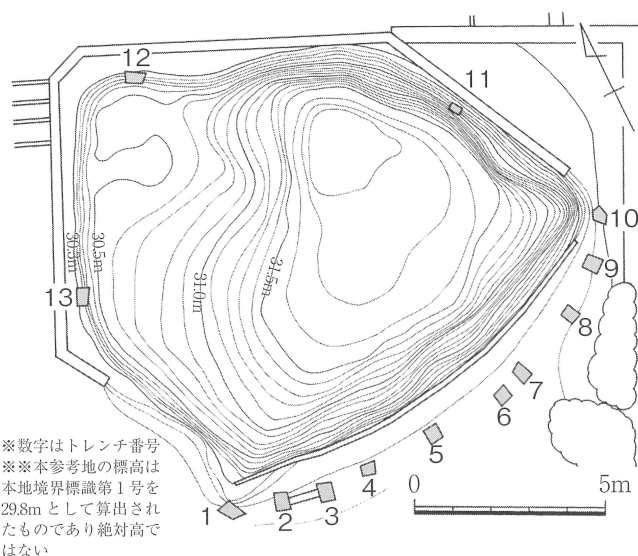
今回の調査は、飛地い号周囲を巡る外構柵が経年劣化により改修されることになり、その工事に際し行ったものである。当初予定では墳丘全周に基礎ブロック埋設方式を採用し、スペース上ブロック埋設が困難な



第 10 図 玉津陵墓参考地 位置図 平成 17 年国土地理院発行 1:25000 地形図「東二見」「明石」使用



第 11 図 玉津陵墓参考地
飛地い号位置図 (1/12500)



第 12 図 玉津陵墓参考地
飛地い号位平面図 (1/200)

一部箇所については鋼管打込基礎とする予定であったが、現地での検討の結果、境界線が墳丘裾を走る西～北～東側の区間ではブロック埋設のみならず柵本体の建て込みも墳丘を削らねば不可能であることが判明し、この区間は鋼管打込基礎に変更されることになった。工期は平成 20 年 2 月 14 日～3 月 27 日で、うち、3 月 10 日～14 日の日程で調査にあたった。調査期間中、基礎ブロック埋設区間については掘削時に立ち会い、鋼管基礎打込区間については、既存外構柵の基礎ブロック撤去によって生じた掘方を清掃し、遺構・遺物の存否の確認に努めた。あわせて等高線 10cm 間隔の墳丘測量図を作成した(第 12 図)。

なお、調査時には神戸市教育委員会事務局社会教育部文化財課谷正俊氏に現地を検分の上、ご教示を得た。記して感謝申し上げたい。

今回観察し得た土層は大きく 6 層に分かれた。Ⅰ層は表土層および墳丘崩落土、Ⅱ層は既存境界標識等の堀方埋土、Ⅲ層は公園造成土、Ⅳ層は公園化以前の推積土、Ⅴ層は墳丘盛土、Ⅵ層は地山層である青灰色粘質土層である。南半部となる基礎ブロック埋設区間ではⅠ層下にⅡ～Ⅳ層が認められ、その直下からⅥ層であった。鋼管基礎打込区間ではⅥ層上にⅤ層が積まれていることが確認できた。墳丘下部は地山層であって遺構などが認められなかったため、鋼管を打ち込んでも問題ないものと判断された(第 13 図)。

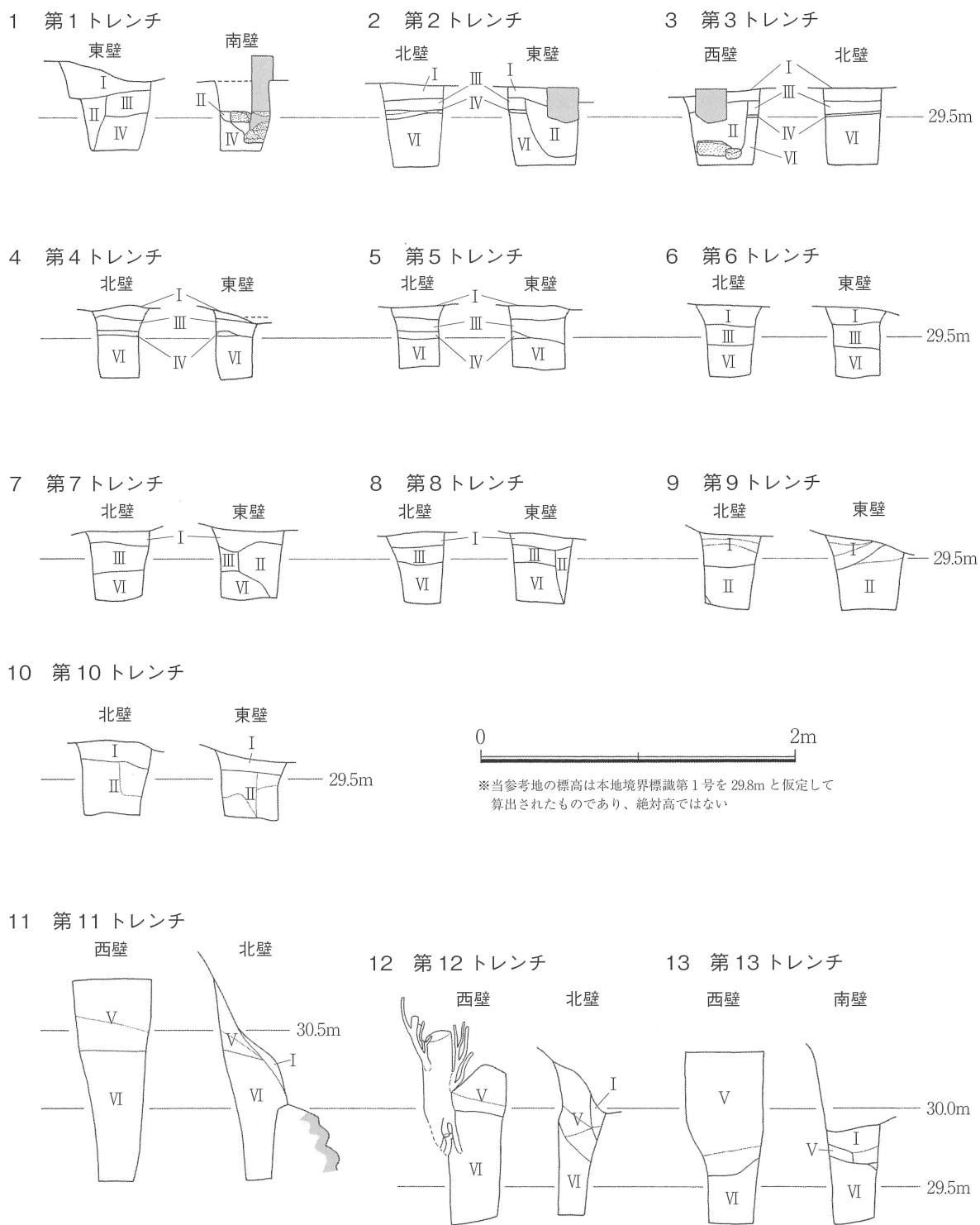
出土遺物はなく、墳丘上あるいは掘削箇所において葦石の存在を示唆するような石材は認められなかった。今回確認された土層の状況や周囲の状況からみて、本来の墳丘は現状よりも大きく、その墳裾は既に削平されているものと思われる。

工事は上述の工法変更を経て施工された。

(有馬 伸)

註

- (1) 『日本書紀』推古天皇 11 年 7 月条に、新羅征討に赴いた當麻皇子が播磨に到った時、妻の舍人姫王が明石で亡くなったため、「赤石檜笠岡上」に葬ったとの記事がある。
なお、『日本書紀』の内容については下記書を参照した。
坂本太郎ほか校訂『日本書紀』下(『日本古典文学大系』68)、岩波書店、1965 年。
- (2) 吉永悦卿「舍人皇女檜笠丘御墓考」『考古学会雑誌』第 2 号、1897 年。
- (3) 徳田誠志・清喜裕二「玉津陵墓参考地墳丘裾・外堤内法護岸工事区域の調査」『書陵部紀要』第 53 号、宮内庁書陵部、2001 年。
- (4) 神戸市教育委員会『神戸市埋蔵文化財分布図』、2008 年。
- (5) 註(2)に同じ。
- (6) 「玉津陵墓参考地之図」宮内庁書陵部陵墓課編『宮内庁書陵部 陵墓地形図集成』、学生社、1999 年。
「幣塚古墳と王塚陪冢」『のじぎく文化財だより』第 45 号、(財)のじぎく文化財保護研究財団、1995 年。



第13図 玉津陵墓参考地 飛地い号 断面図 (1/40)

- (7) 註(4)に同じ。
 (8) 註(2)に同じ。
 (9) 註(6)に同じ。
 (10) 『出土品展示目録 装身具』目録番号 60、整理番号：陵 116(J1-1-4)。
 宮内庁書陵部『出土品展示目録 装身具』、1979年。